



歸校前

永代美知代

『満喜子さん、あなたお浴衣の洗濯するのがあるんなら、早く婆の方へ出しとかないと、いざとなつて間に合ひませんよ、それからお襦袢の仕末なんか出来たのですか、半襟のかけ變へるのがあるんならお出しない、些少母さんも手傳ひませう』  
『有り難う、もう大抵出来ました、行李に詰めさへすれば可いんですの』

満喜姉さんは母さんとこんなことを仰有つてから、

始終お部屋に引籠つては、何かしらこてんぐやつてらつしやいます、折角おもしろいお話をして頂いたり、相手になつて遊んで頂いて居た須磨ちやんは、急に満喜姉さんがお部屋へ行つてお了ひなさるものだから、つまらなくつて仕方がありません。お跡を追つてお部屋を覗いて見ますと、後向きになつて、丁度今行李の蓋を開けかゝつて被入つた満喜姉さんが、此方をお向きになりました。

『ア、須磨ちやんなの、誰かと思つたわ』

『姉さんてば、何してらつしやるの、御用なの？』

須磨ちやんが遊んで頂きたいと云つた容子をしてお首を傾げますと、満喜姉さんも莞爾なさいました。

『ねえつてば、姉さん御用なの？』

『さうよ、だからね、須磨ちやんは彼方でお人形さんとお遊びなさい』

『嫌、私此處に居るのよ、居ても可いこと。』

『可いから、その代り大人しくなさいよ、姉さんはね、一寸とこれからお荷物をするの』

満喜姉さんは行李の蓋を取つて、中から一枚一枚着物だの帯のやうなものを出して被入やいまして、本箱の中から御本を抜いて、ちよいと着物の間へお入れになりました。

「ね、何故御本をお仕舞ひなさるの？」

「だつてもうお家で讀まないんですもの、姉さんはね、明後日はもう學校へ歸るのよ」

「アラ、明後日？」

須磨ちゃん泣き出したやうな震へ聲を立てました。

「明日、明後日、やなさつて」

須磨ちゃんはお指を折つて、拇指から人差指、

それから中高指を折りかゝつて、黙つて二つしか折られてないお指を見入つて居りました。

「ね、もう二日しかないでせう、だから姉さんはお荷物をしなきやいけないわ、須磨ちゃんと遊んでばかり居ちや、歸れないんですものね」

「つまらないわ私、つまらないわ私」



「まあ何故？何を云つてらつしやるのよう」

「だつても私、姉さんが明後日歸るんですもの、嫌だわ私、私も一緒にいきたいわ、ねえ姉さん、後生、つれてつて頂戴な」

須磨ちゃんはお鼻をならして、一生懸命、満喜姉さんのお脇の方に寄つて行きました、満喜姉さんが夏休みで歸つてらつしやつた時の嬉れしさ、それから毎日お連れになつて頂いて、夕方になると御一緒にお湯につかつて、綺麗にお化粧をして頂いて、ハイカラ風のおさげに結つて頂いて、町端の橋の方だの、方々涼みながら散歩に出掛け、本當に本當に楽しくつて、面白くつて、須磨ちゃんは大喜びでしたのに、もうすぐ姉さんは居なくなつてお了ひなさる、學校へ行つてしまつて、もう又久しい間お家へ歸つては被入やらない、須磨ちゃんはずっと悲しくつて、もう一残念で堪りません。

「ようてば姉さん、私も御一緒に連れてつて頂戴」

戴

「オヤ、須磨ちゃんはもう女學校へ上れるやうになつて？」

わざとに満喜姉さんが、ふざけかゝつて仰有います、須磨ちゃんはしらない顔をして、矢張り嫌嫌を續けながら、

「ようてば、よう女學校へ上るんぢやないわ、だれども連れてつて頂戴つて云ふんだわ、ようてば姉さん」

満喜姉さんは又須磨ちゃん「ようてば」が初つたと思つて、にこ／＼笑つて被居やいます、父様や母様だと、中々須磨ちゃんに「ようてば」を云はしてはお置になりません、叱つてお了ひなのですけれど、満喜姉さんはおやさしいんですもの、須磨ちゃんがか愛くつて仕様がなものですから、大抵な事は何でも須磨ちゃん「云ふ通りをお聞きになります。」

「ようてばよう」



須磨ちゃん「お鼻をならして、今一度斯う云ひました、満喜姉さんが何かしら考へ事でもして被居やるやうなので、そつとお顔色を見入つて居りました。」

「須磨ちゃん「姉さんと一緒に學校へついて来たつて、又すぐ姉さんに別れてお家へ歸つて来なくちやならないでせう、ね、だつてあなたは女學生ぢやないんですもの、それでもよくつて？」

満喜姉さんが斯う仰有ると、全くさうだつたと須磨ちゃんも氣がつきましたけれど、何故だか、このまゝ姉さんと別れてしまひたくなく、是非御一緒に學校までお送りして行きたい、それからなら姉さんと別れて、どんなに淋しくなつて、今度お休みに御歸りの日まで、音無しく辛抱出来るやうな氣がして堪りませんでした。

「姉さん、私よく解つてるのよ、解つてるけどもね、どうしても御一緒に行きたいの、御一緒に行つて、すぐ又別れて、一人ぼつちでお家に歸つた

つて可いわ。  
それなら私辛抱してよ、だ  
けども、この  
まゝ、明日、  
明後日、たつ  
た二日つきり  
でお別れする  
のは嫌なんど  
すもの、姉さ  
ん、後生、連  
れてつて頂戴  
な」



ゆふた模様の

「須磨ちやんは涙の一杯たまった眼元で、じつと満喜姉さんのお顔を見据えてお願ひしました。  
「さう、解つても一緒にいきたいつて！」  
満喜姉さんのお眼にも、何時の間にか涙が浮んで参りました。

「姉さんね、このまゝお別れしたくないのよ、一緒にいきたいのよ、だからね、一寸と待つてらつしやい、母様にお願ひして見るから」  
満喜姉さんは須磨ちやんを殘して、お一人で茶の間の方へ被行いました、満喜姉さんの行つてらつしやる學校には、今度新學期の初めに、老講堂告別式の催しがあるのです。満喜姉さんが學校へお歸りになる時

お別れするのよ」

「まア随分面白いわね、姉さん、私早く明後日になる、と好いわ」

「ホ、御一緒に汽車に乗りませうね、お辨當は静岡の鯛壽司がおいしいのよ」

須磨ちやんは姉さんから聞いた東海道の旅の、おもしろさを考へると、もう今から胸が躍るやうに思ひました。

「告別式の唱歌があるんだけど、それは英語だから、須磨ちやんには覺えられないかも知れないわ」

「アア、覺えられるわ私、お汽車の中でも私、すつと通し暗誦にかゝつてよ」

「ちや二人で歌ひませうねえ」  
二人は又につこり笑ひました。——完——



には、いつでも婆やが道中を送り迎へして行く習慣でしたから、今度お歸校なさるにしても、婆やがおつきしなればなりません、どうせ婆やが附添つて行く程なら、須磨子さんも一緒に連れて行つて、老講堂告別式を見せたいと云ふ満喜姉さんのお積りなのでした。  
「須磨ちやんお喜びなさい、萬歳よ」  
如何なる事かと小さな胸をどきつかせて居た須磨ちやんは、思はず飛び上つて満喜姉さんにすがり附きました。

「ホ、嬉れしいの、え、須磨ちやん、嬉しいわね」  
二人は顔を見合つて、にこやかに笑ひました。

「學校ではね、今度老講堂告別式と云ふのがあるのよ、それはねえ、二十五年前學校が創立した最初から、すつと今日まで毎日毎日學生を入れた忠實な講堂がね、もう古くなつて酷くなつてるのよ、人間に例へると、丁度家の婆やみたいに、散々忠實に働いてもうお腰が曲つてしまつたのだから、今度新しい講堂を建てかへるに就いてはね、その老講堂に立派な告別式をして、